

平成 28 年度 第 1 回小松市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成 28 年 6 月 29 日 (水)
開会 13 時 30 分 閉会 14 時 40 分

2 会 場 小松市役所 3 階 3B 応接室

3 出席者 小松市長 和田 慎司 (議長)

小松市教育委員会

教 育 長 石黒 和彦
委 員 北村 嘉章
委 員 野田 美和子
委 員 蘆邊 千鶴子
委 員 吉原 慎吾

(事務局関係)

総合政策部長	早松 利男
総合政策部 経営政策課長	藤井 勝司
総合政策部 経営政策課主幹	出口 真澄
教育委員会事務局 教育次長	山本 裕
教育委員会事務局 シニアマネジャー	柿本 欣也
教育委員会事務局 未来の教育課長	廣田 恵子
教育委員会事務局 青少年育成課長	東谷 勝美
教育委員会事務局 教育庶務課長	吉田 均
教育委員会事務局 教育庶務課参事	池田 美和子
小松市立高等学校教頭	桐生 裕三

4 討議事項 (1) 理科教育の充実について
(2) 市立高校の活性化について

5 会議の経過及び発言

○開 会

○和田市長あいさつ

- ・総合教育会議の位置付けは小松市全体で次の世代を育てていこうというものである。学ぶことは義務教育や高等教育に限らない。シニアも含めた広い範囲で様々なご提言をいただきたい。

- ・理科教育は小松市の特長の一つであり、この4月からサイエンスヒルズを教育委員会に移管した。さらにグローバルな理科教育を進めるにはどうすればいいか。また、中高大連携など今後の活性化について話し合っていきたい。

○討議事項

(1) 理科教育の充実について

〈事務局：未来の教育課長〉【資料1】により説明

- ・小中学校の基礎的な理科科学教育の充実のほか、最新の科学を学びたい、もっと専門的なことを勉強したいという「子ども博士」を育成していく。
- ・ひととのづくり科学館やJAXA、大学などと連携し、子ども達の科学・宇宙への興味や探究心の向上に取り組んでいく。

〈議長：和田市長〉ただ今の説明について、何かご意見やご質問はないか。

〈吉原委員〉サイエンスヒルズを理科教育の中心として積極的に活用していく方向性は良い。例えば、理科の授業を全てサイエンスヒルズで行うといった思い切った取り組みがあってもいいのではないか。

〈野田委員〉小さい子どもが身近に実験をやることにより、理科に興味を持ち、好きになってもらえる。サイエンスヒルズで学校ではできない実験をどんどんやって、子ども達がいろいろな体験をできることは素晴らしい。

〈北村委員〉小松市にある自然や石など地域のいろいろな素材もテーマにして学んでいくべきだと思う。将来に向けて伸ばすような取り組み、夢を与える取り組みをお願いしたい。金沢工業大学などとの大学連携も進めていかなければならない。

〈蘆邊委員〉たくさんの事業があり、小松市全体の子ども達みんなに体験してもらって理科大好きになってほしいと思うが、興味のない子どもに対してどのように参加を促しているのか。

〈事務局〉多くの学校からサイエンスヒルズ来館の申し込みがある。一度体験し、さらに通年化していくことで、たくさんの子どもが理科に触れることになる。また、若手教員にイベントなどの講師として参加してもらい、教員の育成、指導力の向上にも努めていく。

〈北村委員〉サイエンスヒルズの夏休み期間の活用について、来て良かった、また来たいと思えるような取り組みをお願いしたい。

小学校の先生は、どういう目的で理科をやるのかということを理解した上で子ども達に指導してほしい。

子ども博士の育成はとても良い。湯浅・中山賞の研究発表会は大変素晴らしかった。発

表することで子ども達の理科科学のレベルアップにつながる。

〈石黒教育長〉サイエンスヒルズの役割として、初めは子ども達の学力をいかに上げるか、理科好きの子どもをいかに増やすかというところに重点を置いていたが、たくさんのツールを備えた質の高い「理科村」のような施設と捉えるようにした。学校では実験をせず映像を見せるだけの場合もあるが、サイエンスヒルズでは、例えば高度な顕微鏡などを使い、実際に触りながら生で見ても不思議を体験し、理解を深めることができる。宇宙から自然科学まで、理科に関する子ども達の探究心・好奇心・意欲を高め、力を伸ばしていくことを大事にしていきたい。

〈議長〉アクティブラーニングの典型的なものが理科であり、充実させることでいい子ども達が育っていく。

理科離れが進んでいるが、市独自で理科の種類別に意識調査を行い、分析してはどうか。夏休みの過ごし方はとても大事であり、夏休みにどうやって動機付けするかということ、教育委員会の新たなテーマとしてぜひ取り組んでほしい。

親も理科に対する関心が薄い傾向がある。衛星放送などのサイエンスに関する番組プログラムを紹介し、テレビを通じて親子で学習する機会を創出してはどうか。

〈議長〉そのほか事務局から発言はないか。

〈事務局：総合政策部長〉今年度から企業版ふるさと納税が始まり、市から提案した特定の事業に対して企業が寄付をすると、これまでの2倍税控除されることになった。現在、提案する事業について検討しているところである。先ほどからサイエンスヒルズ活用の話が出ているが、もっと充実していきたいという事業で企業の皆さんの理解が得られるようなものがあれば、委員の皆様からのご提案いただきたい。

〈議長〉そのためには、小松には理科大好きな人がたくさんいるというバックデータも必要。

〈事務局：教育次長〉未来の教育課やサイエンスヒルズを十分に活用して、理科大好きな子ども達を育てていきたい。

〈議長〉このテーマについては以上でよろしいか。引き続き皆さんで進めていただきたい。

(2) 市立高校の活性化について

〈事務局：小松市立高等学校教頭〉【資料2】により説明

- ・今年度から新たに（仮称）英語ラボを開設予定。英会話の訓練スペース、英語のDVDや蔵書を設置し、ALTの先生も在室する。

- ・平成30年度開学予定の公立小松大学との連携を模索しているところである。
- ・地域の皆様に支持される、応援される学校を目指していきたい。

〈野田委員〉生徒たちが目標を持ち、修学旅行で直接現地の人と交流することはとても良いことだと思う。市内の他高校では、生徒達に海外の学校で研究発表をさせて質問にも英語で答えるといったことをやっている。発表の場を持たせれば、英語能力の向上につながると思う。芸術コースの生徒も海外で発表・演奏の機会を設ければ、夢があるし、市立高校の魅力にもなるのではないかな。
最近ではTOEICやTOEFLもあり、目標を持って英語学習に取り組めるようにしてあげたらよい。

〈吉原委員〉市立高校の活性化については以前から議論しており、当初はもう少し根本的な部分、目指すべき方向性などを話し合ってきた。今の説明は手段の話であったが、市立高校の具体的なゴールイメージを持っていて、そのための施策と捉えればいいのか。

〈議長〉5か年計画の途中の重点政策であると理解している。

〈石黒教育長〉今回説明した内容は、5年スパンの中の4年目の取り組みである。

〈議長〉市立高校の全体像について、教育委員会で議論してほしい。

〈蘆邊委員〉シンガポール・マレーシアへ修学旅行に行ってきた子ども達に英語を話したのか聞いてみたところ、話していないという回答もあった。異文化体験には役立っていると思うが、修学旅行の中身がもっと充実するよう考えてもらいたい。

〈議長〉英語ラボの設置により、来年の2年生が現地で英語が話せるようになることを期待したい。

〈事務局〉現地の大学生ガイドが日本語を話せる場合は、英語を使わなくても大丈夫なケースもあると聞いている。

〈蘆邊委員〉そういう事前調査も大事だが、個人個人が課題を持って参加することが重要。しっかりと事前に計画して修学旅行に臨んでほしい。

〈議長〉英語を話すことはできなかったけど聞き取りはできたなど、生徒により得意なもの苦手なものがあり、まずは、自分の強み・弱みを理解できるようになればよい。

〈北村委員〉外に向けて情報を発信していくことが大事。進学の数値目標を設定し、成果

や結果を外にPRしなければならない。また、公立小松大学との連携や、海外の姉妹校への留学・交流、芸術コースに一流の先生を招くなど、市立高校の特徴的な魅力を高めてアピールすべきである。

〈議長〉 今後、公立小松大学との関連をどう進めていくかが重要である。また、芸術の分野、宇宙科学の分野など、全国の様々なところ、様々な著名人と連携をしていくべき。それらを含めた、第2期の活性化プランに着手しなければならない。

〈石黒教育長〉 社会の状況、時代の流れに合わせて教育が左右されている。小松市立高校として、どういう状況があってどう変えていくのか、方向性を明確にすることが大事。グローバル化の進展により、今の生徒達は外国の高校生と勝負していくことになっていく。学力もさることながらコミュニケーション能力が必要になり、物事を英語に変換して伝えていくことが大事になる。

〈事務局：総合政策部長〉 少子化を受け、高等学校においても定員見直しは避けられない。個人的には、普通科と芸術コースの2つを続けていくことが大丈夫なのか、どちらか一方に特色を出して頑張った方がいいのではないかと、という思いはある。

〈議長〉 難しい問題提起である。成績だけを追いかけるのが教育ではない。同じ校舎内に違った学科があることで良い刺激になるのではないかとも思う。今は入学希望者がいるので良い方向にどう伸ばしていくかが大事。オリンピックはスポーツだけでなく芸術・文化との融合でもあり、厳しい時代だからこそ、そういうことも忘れないようにしたい。学科については将来に向けたテーマである。

〈北村委員〉 芸術コースは必要だと思う。広くPRをして、市内だけでなく県外からも生徒が来るように仕掛けていただきたい。
例えば、市立高校の生徒は、勤進帳を英語でスピーチできるようにすれば、地域愛を育てるとともに地域の発信にもつながる。

〈石黒教育長〉 英語ラボでも、目的を子ども達にしっかり伝えていかなければならないが、今までどおりの固定化された学習環境が気になる。子どもの現状を見て、学びを広げていくという方向性が大事。

〈議長〉 英語ラボについては、スタートが肝心なので、9月からのプログラムについて教育長と打ち合わせをして、また、このメンバーに報告していただきたい。

〈野田委員〉 市立高校の保護者から「成績優秀者の氏名を1年生のときから掲示してほしい」という話を聞いた。

〈事務局〉 掲示は3年生からであり、年度初めに保護者の了解を得た上で行っている。掲示については賛否両論がある。

〈蘆邊委員〉 子ども達がみんな同じ方向ではなく、英語だけでなく、そのほかの分野でも個人個人に応じて伸ばしていくという考えも必要である。

〈事務局：教育次長〉 小松市立の唯一の高校であり、独自のユニークなことに創造的に取り組んでいけるのではないかと思う。そういう視点で市立高校の支援に当たっていききたい。

〈議長〉 外国語、サイエンスを学ぶ上で、向上心の持続性が大切であり、そこに好奇心や探究心があれば、途中で挫折したとしてもまた続いていく。そういう様々な環境づくり、先生と生徒、親と子の関係づくりなど、広くやっていかないといけない。語学や理科に関して、小松の子ども達は恵まれている、優秀であると言われるよう、3年5年掛けてやっていきましょう。

制服のリニューアルは学校のイメージアップにつながる。夏服先行でも構わないので、取り掛かってほしい。

〈議長〉 そのほか意見はないか。次回は、教育大綱の平成27年度総括と、平成28年度、29年度までの展開について、皆さんのご意見をいただきたい。

○閉 会